

正史を訪れる

Part IV 三国史記

十三章 高句麗本記

森隆一



好太王碑（Wikipedia「好太王碑」より）

はじめに

13.1. 第1代 東明聖王 BC37-BC19 朱蒙（鄒牟、衆解）

前文

“夫餘王の解夫妻老には子が無かった。”

夫餘王解夫妻老無子

に続いて、金蛙伝説が書かれている。 前文の終わりのほうに

“卒本川に至った。その地が土は肥え、山河は美しく堅固であることを
見て、都とすることを望んだ。あわただしく宮室を作っていなく、沸流
水の辺に庵を建て住んでいる。国は高句麗という。高を氏とするからで
ある。”

至卒本川(魏書云 至升骨城) 觀其土壤肥 美
山河險固 遂欲都焉 而未遑作宮室 但結廬於沸流水上居之 國號高句麗 因以高爲氏

Wiki「高句麗」では、

卒本は現在の遼寧省本溪市桓仁満族自治県(吉林省との省境近くの鴨緑江の少し
北)で、都城の卒本城は五女山山城に比定されている。

と書かれている。

“ある書では、朱蒙が卒本に至った。夫餘王には子が無く、朱蒙の常人
でないのとみて、娘を妻とした。王が薨り、朱蒙が跡を継いだ。”

一云 朱蒙至卒本夫餘 王無子 見朱蒙知非常人 以其女妻之 王薨 朱蒙嗣位

卒本は夫餘の地であった。次の記事はこれに続く。

“このとき朱蒙は 22 歳であった。漢の孝元帝の建昭二年 BC7 であり、新羅の始祖赫居世の二十一年である。”

時朱蒙年二十二歳 是漢孝元帝建昭二年 新羅始祖赫居世二十一年甲申歳也

建昭は元帝の元号の 1 つで、BC38 年から BC34 までで、二年は BC37 年である。新羅に関する記事は唐突である。9 章で、正史からは BC75 年に高句麗侯が冊封された。上の記事とのギャップは疑問 9.1 としておいた。

“二年 BC36 松讓が国をあげて來降した。その地を多勿都とし、松讓を封じ主とした。麗語でいう 復舊土爲多勿である。これより名付けた。”

松讓以國來降 以其地爲多勿都 封松讓爲主麗語謂復舊土爲多勿故以名焉

“六年 BC32 王は烏伊扶芬奴に命じて、太白山東南人國を伐ち、その地を城邑とした。”

王命烏伊扶芬奴 伐太白山東南人國 取其地爲城邑

コトバンク「城邑」では、

城壁にかこまれた町。転じて、人家の多い土地。都会。みやこ。

とある。城壁を造ったのか。街を囲むのか、支配機構のみか。

“十年 BC28 王は扶尉に命じて、北沃沮を伐たせこれを滅ぼした。その地を城邑とした。”

王命扶尉 伐北沃沮滅之 以其地爲城邑

“十四年 BC24 徳に報いるため、夫餘に使いを派遣し、方物を贈った。”

遣使夫餘 饋方物 以報其徳

“十九年 BC19 王子の類利は夫餘より母と共に逃げ帰った。”

王子類利自夫餘與其母逃歸

“王升遐 王は升遐した。40 歳であった”。

時年四十歳

13.2. 第2代 瑠璃明王 BC19-18 類利（孺留）

% A4, 3896 高句麗 01

王莽の新は9年から23年である。

“母は禮氏である。”

母禮氏

“二年 BC18 七月 多勿侯松讓の娘を妃とした。”

納多勿侯松讓之女爲妃

“九月 西で狩りをし、白を獲った”。

西狩獲白

“十月 神雀が王庭に集まった。百濟の始祖が祚立した。”

神雀集王庭 百濟始祖祚立

と書かれているが、百濟が書かれているのは何故か。建昭二年は BC37 年である。

“三年 BC17 王妃の松氏が薨かった。王は二女を娶り、繼室とした。．．．”

王妃松氏薨 王更娶二女以繼室 一曰禾姫 鶻川人之女也 一曰雉姫 漢人之女也

“十一年 BC9 王は郡臣にいった：鮮卑が陰しい。．．”

王謂羣臣曰

鮮卑恃險 不我和親 利則出抄 不利則入守 爲國之患 若有人能折此者 我將重賞之

この頃から、鮮卑の拡張が始まったのか。

“十四年 BC6 正月夫餘王の帶素は使いを派遣し、人質を要求した。王は扶余の強大であることを懼れ、太子の都切を質としようとしたが、都切

は恐れ行かなかった。帶素はこれを怒った。”

夫餘王

帶素遣使來聘 請交質子 王憚夫餘強大 欲以太子都切爲質 都切恐不行 帶素患之

“十一月 帶素は兵 5 万で來侵したが、大雪で人が多く凍死したため去った。”

帶素以兵五萬來侵 大雪 人多凍死 乃去

“二十年 1 太子の都切が卒した。”

太子都切卒

“二十二年 3 國內に遷都し、尉那巖城を築いた。”

王遷都於國內築尉那巖城

“二十七年 8 正月 王太子の解明は古都にいた。力があり勇敢であった。三月 黄龍國王はこれを聞き、使いを派遣し、強弓を贈った。”

王太子解明在古都 有力而好勇 黄龍國王聞之 遣使以強弓爲贈

“三月 黄龍王使を遣り、太子に相見を要請した。太子は行こうとしたが、次のように諫めた人がいた：今隣国は無責任に会見を請うていますがその真意は測りがたい。太子は言った：天は私が殺されることを望まない。・・・（訳）”（今は約せない。）

三月 黄龍王遣使 請太子相見 太子欲行 人有諫者曰：今鄰國無故請見 其意不可測也 太子曰：天之不 欲殺我 黄龍王其如我何 遂行 黄龍王始謀殺之 及見不敢加害 禮送之

“二十八年 9 三月（訳）”（今は約せない。）

王遣人謂解明曰 吾遷都 欲安民以固邦業 汝不我隨 而恃剛力 結怨於鄰國 爲子之道 其若是乎 乃賜劒使自殺 太子即欲自殺 或止之曰 大王長子已卒 太子正當爲後

今使者一至而自殺 安知其非詐乎 太子曰 嚮黃龍王以強弓遺之 我恐其輕我國家 故
挽折而報之 不意見責於父王 今父王以我爲不孝 賜劒自裁 父之命其可逃乎 乃往礪
津東原 以槍挿地 走馬觸之而死 時年二十一歲 以太子禮葬於東原 立廟 號其地爲槍
原

“八月（訳）”（今は約せない。）

八月 扶餘王帶素使來 讓王曰 我先王與先君東明王相好 而誘我臣逃至此 欲完聚
以成國家・・・

“三十一年 12 漢王の莽が我兵に胡を伐つように命じた。が、吾らは行か
なかった。（正史と同じ内容）（訳）”

漢王莽發我兵伐胡 吾人不欲行 強迫遣之 皆亡出塞 因犯法爲寇 遼西大尹田譚追
擊之 爲所殺 州郡歸咎於我 嚴尤奏言 貊人犯法 宜 令州郡 且慰安之 今猥被以大罪
恐其遂叛 扶餘之屬 必有和者 匈奴未克 扶餘・貊復起 此大憂也 王莽不聽 詔尤擊
之 尤誘我將延丕斬之 傳首京師（兩漢書及南北史皆云誘句麗侯斬之）莽悅之 更名
吾王爲下句麗侯 布告天下 令咸知焉 於是 寇漢邊地愈甚

後漢書に 王莽初 8 發高句麗兵以伐胡 不欲行 強迫遣之 皆亡出塞爲寇
盜・・・の記事がある。王莽初は 9 年にあたり、12 年の記事は対応し
ている可能性がある。王莽初は 8 年と 9 年の 2 つがある。前漢が 12 月に
終わったことに依る。

“三十二年 13 夫餘人が來侵した。王は子の無恤を使い、軍を率いてこれを防がせた。無恤は兵が少ないため、敵わないことを恐れ、奇計を設けた。・・・扶餘軍は大敗し、馬を棄て山に登った。・・・”

夫餘人來侵 王使子無恤 率師禦之 無恤以兵小 恐不能敵 設奇計 親率軍 伏于山谷以待之 扶餘兵直至鶴盤嶺下 伏兵發 擊其不意 扶餘軍大敗 棄馬登山 無恤縱兵盡殺之

“三十三年 14 正月 王子の無恤を太子とし、軍政と國政を委ねた。”

立王子無恤爲太子 委以軍國之事

“八月 烏伊・摩離に兵二萬をもって西の梁貊を伐るように命じた。その国を滅ぼし、兵を進めて、漢の高句麗県を襲い取った。”

王命烏伊・摩離 領兵二萬 西伐梁貊 滅其國 進兵襲取漢高句麗縣（縣屬玄菟郡）

梁貊は貊の一種か。梁貊が西に在り、その先に高句麗縣があった。高句麗縣と高句麗との関係は。

Wikipedia「玄菟郡」 から、

紀元前 75 年(元鳳 6 年)に玄菟郡は西へ縮小移転され、元の郡治の場所には高句麗侯が冊封された

とある。

高句麗侯は高句麗縣に冊封されたはずである。感じとしては、高句麗本紀の高句麗が高句麗侯となったのか。

五部で王が変わることとの関係は。三国志では

涓奴部→桂婁部→淫灌奴部

伊夷模→位宮

と部の交替が行われている。涓奴部→桂婁部 はいつか。

%% 削除か移動

“三十七年 18 四月 王子は津で溺死した。”

王子如津 溺水死

“十月 豆谷離宮で薨かった。豆谷東原に葬り、琉璃明王と号した。”

薨於豆谷離宮 葬於豆谷東原 號爲琉璃明王

後漢書に 王莽初 8 發高句麗兵以伐胡 不欲行 強迫遣之 皆亡出塞爲寇盜・・・

の記事がある。王莽初は 9 年にあたり、12 年の記事は対応している可能性がある。王莽初は 8 年と 9 年の 2 つがある。前漢が 12 月に終わったことに依る。

13.3. 第3代 大武神王 18-44 無恤

%% A4,,3998 高句麗 02

“母は松氏で、多勿國の王松讓の娘である。” 母松氏 多勿國王松讓女也

“二年 19 千戸を超える百濟の民が來投した。” 百濟民一千餘戸來投

とあるが、唐突的である。ただし、百濟が樂浪郡の南でなければ前百濟とすれば可能性もある。例えば、小水貊を前百濟と考える。

“三年 20 夫餘王の帶素は使いを派遣し赤烏を送ってきた。”

夫餘王帶素遣使送赤烏

四年 21 王は兵を出し夫餘を伐った。 王出師伐夫餘

五年 22 二月 王は夫餘國の南に軍を進めた。そこは泥地で、王は平地を選んで宿営した。鞍を解き、兵を休め安心していた。夫餘王は国を挙げて出戦し・・・直進し扶餘王をとらえ斬首した。

王進軍於夫餘國南 其地多泥塗 王使擇平地爲營 解鞍休卒 無恐懼之態 扶餘王舉國出戦・・・直進執扶餘王斬頭

“四月 扶餘王帶素の弟は曷思水の濱に至り、國王を称した・・・。”

扶餘王帶素弟 至曷思水濱 立國稱王・・・

“(訳)” (理解できていない)

七月 扶餘王從弟謂國人曰：我先王身亡國滅 民無所依 王弟逃竄 都於曷思 吾亦不肖 無以興復 乃與萬餘人來投 王封爲王 安置掾那部 以其背有絡文 賜姓絡氏

“八年 25 二月 乙豆智を右輔とし軍國の事を委ねた。”

拜乙豆智爲右輔 委以軍國之事

“九年 26 十月 王は蓋馬國に親征し、その王を殺し母を捕虜とした。其地を郡縣とした。” 王親征蓋馬國 殺其王 慰安百姓 母虜掠 但以其地爲郡縣

蓋馬國 は 玄菟郡 西蓋馬 かその東か。この辺りに前百濟(と前新羅、更にあるいは、前倭)が居たかもしれない。

“十二月 (訳)” (理解できていない)

句茶國王聞蓋馬滅 懼害及己 舉國來降 由是拓地浸廣

“十年 27 乙豆智を左輔とし、松屋句右輔とした。”

拜乙豆智爲左輔 松屋句爲右輔

左が上。左輔が亡くなったのか。八年に乙豆智に委ねた以軍國之事はそのまま乙豆智か。

“十一年 28 (訳)” (理解できていない)

漢遼東太守將兵來伐 王會羣臣 問戰守之計 右輔松屋句曰・・・左輔乙豆智

曰：・・・

“十三年 30 買溝谷人の尚須とその弟尉須および堂弟子刀らが來投し

た。” 買溝谷人尚須 與其弟尉須及堂弟子刀等來投

“十五年 32 十一月 王子の好童が自殺した。好童は王の次妃の曷思王の

孫の娘が生んだ。” 王子好童自殺 好童 王之次妃曷思王孫女所生也

妃が曷思王か、曷思王が妃となったのか。

“十二月 王子解憂を太子とした。”

立王子解憂爲太子

“使いを派遣し漢に朝貢した。これは(光)武帝 8 年 32 である。”

遣使入漢朝貢 光武帝復其王號 是立武八年也

“二十年 37 王は樂浪郡を襲いこれを滅ぼした。”

王襲樂浪 滅之

“二十七年 44 九月 漢の光武帝は兵を海を渡って派遣し、樂浪を伐ち、

その地を郡縣とした。”

漢光武帝遣兵渡海 伐樂浪 取其地 爲郡縣

“二十七年 44 十月 王は薨かった。大獸村原に葬り、大武神王と号し

た。”

王薨 葬於大獸村原 號爲大武神王

13.4. 第4代 閔中王 44-48 解色朱

% A4, , 4065 高句麗 02

“大武神王が薨かったとき、太子は幼少で、政務は出来なかった。ここで、國人は推戴し王とした。”

大武神王薨 太子幼少 不克即政 於是 國人推戴以立之

“四年 47 七月 又田で石窟を見て、左右にいった：自分は死ぬからここに葬むり、陵墓を造る必要はない。”

又田 見石窟 顧謂左右曰 吾死必葬於此 不須更作陵墓

“十月 蠶支落部の大家戴升等一万人が漢の楽浪郡に投降した。”

蠶支落部大家戴升等一萬餘家 詣樂浪投漢（後漢書云 大加戴升等萬餘口）

“五年 48 王が薨かった。王后と群臣は命に従い、石窟に葬り、閔中王と号した。”

王薨 王后及羣臣 重違遺命 乃葬於石窟 號爲閔中王

13.5. 第5代 慕本王 45-53 解憂（解愛婁）

%% A4,,4084 高句麗 02

“閔中王が薨かり、即位した。爲人暴戾不仁不恤國事 であつたため、百姓はこれを恐れた。” 閔中王薨 繼而即位 爲人 暴戾不仁 不恤國事 百姓怨之

“元年 45 王子の翊を王太子とした。” 立王子翊爲王太子

“二年 46 將を派遣し漢の北平・漁陽・上谷 太原を襲った。遼東太守の祭は 以恩信待之 和親を復した。”

遣將襲漢北平 漁陽 上谷 太原 而遼東太守祭 以恩信待之 乃復和親

“六年 50 杜魯が其君を弑した。杜魯は慕本人である。左右に侍らうものは殺すのを見て哭いた。・・・慕本原に葬り、慕本王と号した。”

杜魯弑其君 杜魯慕本人 侍王左右 慮其見殺 乃哭・・・遂葬於慕本原 號爲慕本王

正史からは、王の出身部族が変わった。

13.6. 第6代 太祖大王 53-146 宮

% A4,,4102 高句麗 03

“母の太后は扶餘人である。”

母太后扶餘人也

“慕本王が薨かったとき、太子は不肖で社稷の主としては不足であった。國人は宮を迎え後継とした。年は7歳で太后が垂簾聽政を行った。”

慕本王薨 太子不肖

不足以主社稷 國人迎宮繼立 王生而開目能視 幼而岐嶷 以年七歲 太后垂簾聽政

Wikipedia「垂簾聽政」では、

垂簾聽政は、皇帝が幼い場合、皇后・皇太后のような女性が代わって摂政政治を行うこと。
と書かれている。

前半は漢と夫餘へ進攻の記事はなく、周辺の国を攻略と国内の記事のみである。光武帝の時代には漢の勢力が強く、襲うことが出来なかったのではないか。在位年数が93年と少し長い。

前王の直系ではなく、2代琉璃王の孫となっている。ここで、涓奴部→桂婁部 が為されたかもしれない。

“三年 55 西に十城を築き、漢の兵に備えた。”

築遼西十城 以備漢兵

“四年 56 東沃沮を伐ち、その地を城邑とした。境界を開拓し、東は滄海に至り、南は薩水に至った。” 伐東沃沮

取其土地爲城邑 拓境東至滄海 南至薩水

“十六年 68 曷思王の孫の都頭が國を挙げて來降した。都頭を于台とした。” 曷思王孫都頭 以國來降 以都頭爲于台

“二十年 72 遣貫那部の沛者達賈が藻那を伐ち、その王を虜にした。”

遣貫那部沛者達賈 伐藻那 虜其王

“二十二年 74 王は桓那部沛者薛儒を派遣し、朱那を伐ち、その王子の乙音を古鄒加とした。” 王遣桓那部沛者薛儒 伐朱那 虜其王子乙音爲古鄒加

五部の 消奴部、絶奴部、順奴部、灌奴部、桂婁部 には貫那部はない。読みからは灌奴部であろう。ここに、○奴があり、奴と那とは転用が可能と思われることは倭奴と関連するかもしれない。

“二十五年 77 夫餘の使いが來た。” 夫餘使來

二十五年 77 より四十六年 97 まで 21 年間他の記事もなし。前 2 王の在位期間が短い。この王の在位を前に延ばしたのか。

“四十六年 97 三月 王は柵城の東巡をした。柵城の西山に至ったとき、白鹿を獲らえた。柵城に至り、群臣と宴をした。．．．” 王東巡柵城

至柵城西山 獲白鹿 及至柵城 與羣臣宴飲 賜柵城守吏物段有差 遂紀功於岩 乃還

“十月 王は柵城より戻った。”

王至自柵城

“五十年 102 使いを派遣し柵城を安撫した。”

遣使安撫柵城

“五十三年 105 正月 夫餘の使いが虎を献じた。”

夫餘使來獻虎

“王は将を派遣し、漢の遼東に入り、六縣を奪掠した。太守の耿は出兵しこれを拒んだ。王の軍は大敗した。”

王遣將入漢遼東 奪掠六縣 太守耿出兵拒之 王軍大敗

“九月 耿は獬人を撃破した。”

耿撃破獬人

“五十七年 109 漢に使いを派遣し、安帝の元服を賀した。”

遣使如漢 賀安帝加元服

“五十九年 111 漢に使いを派遣し、方物を貢獻し、玄菟郡への帰属を求めた。”

遣使如漢 貢獻方物 求屬玄菟

(通鑑言 是年三月 麗王宮與穢貊寇玄菟 不知或求屬或寇耶 抑一誤耶)

“六十六年 118 王と穢貊は漢の玄菟郡を襲い、華麗城を攻めた。”

王與穢貊襲漢玄菟 攻華麗城

“六十九年 121 漢幽州刺史馮煥・玄菟太守姚光・遼東太守蔡諷らの將兵は來侵し、穢貊の渠帥を撃殺した。”

漢幽州刺史馮煥・玄菟太守姚光・遼東太守蔡諷 等 將兵來侵 撃殺穢貊渠帥

“十月 王は夫餘に幸した。太后の廟を祀った。・・・” 王幸夫餘 祀太后廟 存問百姓窮困者 賜物有差 肅慎使 來 獻紫狐裘及白鷹・白馬 王宴勞以遣之

“十一月 王は夫餘より帰った。遂成に軍國事統べさせた。”

“十二月 王は馬韓・穢貊の一萬餘騎を率いて、玄菟城に進み囲んだ。夫餘王は子の尉仇台に兵二萬つけて派遣し、漢と併せて拒んだ。我が軍は大敗した。”

王率馬韓・穢貊一萬餘騎

進圍玄菟城 夫餘王遣子尉仇台 領兵二萬 與漢兵并力拒戰 我軍大敗

太后が亡くなり、夫餘との友好関係が消滅したのか。

(前)百済を馬韓に替えた。馬韓との間には、樂浪郡がある。馬韓から樂浪郡を迂回して、遼東に遠征することができたのか。

“七十年 122 王と馬韓・穢貊は遼東を侵した。夫餘王は援軍を派遣しこれを破った。” 王與馬韓・穢貊侵遼東 夫餘王遣兵救破之 (馬韓以百済温祚王

この記事が宋書の 高麗略有遼東 百済略有遼西 百済所治 謂之晉平郡晉平縣 に対応するのか。

“(訳)” (理解できていない)

二十七年滅 今與麗王行兵者 盖滅而復興者歟)

% 出处、下から遂成に関する記事か

遂成は宮の弟。

“七十二年 124 漢に使いを派遣し、朝貢した。” 遣使入漢朝貢

“八十年 132 遂成は倭山で獵をし、左右と宴を開いた。・・・”

遂成獵於倭山 與左右宴 於是 貫那于台彌儒・桓那于台支留・沸流那皂衣陽神等
陰謂遂成曰 初 慕本之薨也・・・

台は五部の各部の役職。

“九十四年 146 七月 遂成は倭山の下で獵をした。”

遂成獵於倭山之下・・・

倭山に倭または倭奴がかって住んでいたと言えれば面白い。

“八月 王は將を派遣し、漢の遼東郡の西安平縣を襲い、帶方令を殺し、
樂浪郡の太守の妻子を掠得した。”

王遣將 襲漢遼東西安平縣 殺帶方令 掠得樂浪太守妻子

“十月 右輔の高福章は王に謂った：遂成謀叛しようとしている。先んじて
誅することを請う。王はいった・・・”

右輔高福章言於王曰 遂成將叛 請先誅之 王曰・・・

“十二月 王は遂成に謂った。・・・位を譲り別宮に退いた。太祖大王と
称した。” 王謂遂成曰・・・乃禪位 退老於別宮 稱爲太祖大王

“(訳)” (理解できていない)

後漢書云 安帝建光元年 高句麗王宮死 子遂成立 玄菟太守姚光上言 欲因其喪 發
兵擊之 議者皆以爲可許 尚書陳忠曰 宮前桀黠 光不能討 死而擊之非義也 宜遣吊問
因責讓前罪 赦不加誅 取其後善 安帝從之 明年 遂成還漢生口 案海東古記 高句麗國

祖王高宮 以後 漢建武二十九年癸巳 即位 時年七歳 國母攝政 至孝桓帝本初元年丙戌 遜位讓母弟遂成 時宮年一百歳 在位九十四年 則建光元年 是宮在位第六十九年 則漢書所記 與古記抵 不相符合 豈漢書所記誤耶

正史の記事に始めて名前の載る王。

13.7. 第7代 次大王 146-165 遂成

%% A4, ,4248 高句麗 03

“太祖大王の讓位を受け即位した。79 歳であった。”

受太祖大王推讓 即位 時年七十六

“二年 148 二月 貫那沛者彌儒を左輔とした。” 拜貫那沛者彌儒爲左輔

“三月 右輔の高福章を誅した。市に臨み福章は嘆いていった。・・・

誅右輔高福章 福章臨死嘆曰・・・

“三年四月 王は太祖大王の長子の莫勤を人を使って殺した。その弟の莫徳は恐怖のあまり自縊した。”

王使人殺太祖大王元子莫勤 其弟莫徳恐禍連及 自縊

(嘆曰・・・ の後、以下が書かれている。%% 訳せれば)

“二十年三月 太祖大王が別宮で薨かった。119 歳であった。”

太祖大王薨於別宮 年百十九歳

“十月・・・王を弑し、次大王と号した。”

椽那自衣明臨荅夫 因民不忍 弑王 號爲次大王

太祖大王でなく次大王か。事蹟が殆どない。

13.8. 第8代 新大王 165-179 伯固（固，句）

%% A4,,4262 高句麗 04

“俯伏の後即位した。77 歳であった。” 俯伏三讓而後即位 時年七十七歳

“王三年 167 九月 は卒本で、始祖廟を祀った。” 王如卒本 祀始祖廟

“十月 王は卒本より至った。” 王至自卒本

“四年 168 漢の玄菟郡の太守が耿來侵し、我軍數百人を殺した。王は自ら降伏し、玄菟郡に帰属することを乞うた。”

漢玄菟郡太守耿臨來侵 殺我軍數百人 王自降乞屬玄菟

“五年 169 王は大加の優居・主簿の然人と将兵を派遣し、玄菟太守が公孫度を討つのを助けた。”

王遣大加優居・主簿然人等 將兵助玄菟太守公孫度討富山賊

“八年 172 漢は大兵を我らに向かわせ、．．．” 漢以大兵嚮我．．．

“十五年 179 王は薨かった。故國谷に葬り、新大王と号した。”

王薨 葬於故國谷 號爲新大王

13.9. 第9代 故國川王 179-197 伊夷謨（男武）

% A4, , 4262 高句麗 04

“伯固が薨じた。長子の拔奇は不肖であったので、國人は伊夷謨を共立し王とした。．．．(訳)”

伯固薨 國人以長子拔奇不肖 共立伊夷謨爲王 漢獻帝建安初 拔奇怨爲兄而不得立
與消奴加 各將下戸三萬餘口 詣公孫康降 還住沸流水上 王身長九尺 姿表雄偉 力能
扛鼎 事聽斷 寬猛得中

“二年 180 二月 妃の于氏を王后とした。后は提那部の于素の娘である。”

立妃于氏爲王后 后提那部于素之女也

“九月 王は卒本で、始祖廟を祀った。”

王如卒本 祀始祖廟

始祖廟は初出と思われる。

“六年 185 漢遼東太守とその軍隊が我々を伐った。王は王子の須を派遣し、これを拒んだが克てなかった。王は精騎を自ら率いて、坐原で漢軍と戦い、これを破り、斬首が山積みとなった。”

漢遼東太守

興師伐我 王遣王子須拒之 不克 王親帥精騎往 與漢軍戰於坐原 敗之 斬首山積

“十三年 192 四月 左可慮らが衆を聚め、王都を攻めた。王は畿内の兵馬をことごとく徴し、命令した．．．”

左可慮等聚衆 攻王都 王徵畿内兵馬平之 遂下令曰・・・

“十月 王は晏留に謂った（訳）”

王謂晏留曰 若無子之一言 孤不能得巴素以共理 今庶績之凝 子之功也 乃拜爲大使者

“十九年 198 中國で大亂がおきた。漢人で乱を避けて來投するものが甚大であった。これは獻帝の建安二年 197 のことである。”

中國大亂 漢人避亂來投者甚多 是漢獻帝建安二年也
184 年に起きた黄巾の乱であろう。

“五月 王が薨かった。故國川原に葬ったことより、故國川王と号した。”

王薨 葬于故國川原 號爲故國川王

13.10. 第10代 山上王 197-227 位宮（延優）

% A4, ,4321 高句麗 04

“魏書では：朱蒙の裔孫宮は生まれたとき目を開いて見ることが出来た。これより太祖となした。今この太祖の曾孫は、曾祖の宮に似て、生まれたときから見ることができる。高句麗は太祖に似たものを呼び、位につけた。それゆえ、名を位宮という。故國川王は子が無いため、（延優）後継とした。”

魏書云 朱蒙裔孫宮 生而開目能視 是爲太祖 今王是太祖曾孫 亦生而視人 似曾祖
宮 高句麗呼相似 爲位 故名位宮云 故國川王無子 故延優嗣立

就位の話。

“二年 198 二月 丸都城を築く。”

築丸都城

首都の卒本城より遷都したのか。丸都城はその東の鴨緑江沿いの地であり、長白山脈の西側。

“七年 203 八月 國相の乙巴素が卒した。國人はひどく悲しみ、声をあげて泣いた。王は高優婁を國相とした。”

國相乙巴素卒 國人哭之慟 王以高優婁爲國相

“十三年十月 王は丸都に遷都した。”

王移都於丸都

“十七年正月 郊王を太子とした。”

立郊王太子

次の記事は十一年八月であったが、十七年と二十三年の間に書かれている。二十一に修正した。

“二十一年 217 八月 漢の平州人の夏瑤が百姓一千餘家とともに來投した。王はこれを受け入れ、柵城に置いた。”

漢平州人夏瑤 以百姓一千餘家來投 王納之 安置柵城

前にも出たが 柵城 は地名かもしれない。

Wikipedia「平州」では、

後漢末に公孫度が平州牧を号し、公孫三代にわたり東夷九種を服属させた。曹魏は東夷校尉を設置、襄平を派遣し、遼東郡・昌黎郡・玄菟郡・帶方郡・樂浪郡の五郡を幽州から分離し平州を設置したが、その後幽州に再統合されている。

“三十一年 227 王は薨かった。山上陵に葬り、山上王と号した。”

王薨 葬於山上陵 號爲山上王

13.11. 第11代 東川王 東襄王 227-248 憂位居（少名郊）

% A4, , 4371 高句麗 05

“母は酒桶の人で、入台して山上小后となった。族姓を失った。”

母酒桶村人 入爲山上小后 史失其族姓

“二年 228 王は卒本で、始祖廟を祀った。” 王如卒本 祀始祖廟

“四年 230 國相の高優婁が卒して、于台の明臨於湫を國相とした。”

國相高優婁卒 以于台明臨於湫爲國相

“八年 234 魏が使いを遣わしてきて和親した。” 魏遣使和親

魏の初出である。

“十年 236 二月（訳）呉王の孫權は使者の胡衛を遣わした。王はその使いを留めた。”

呉王孫權 遣使者胡衛通和 王留其使

“七月 使いの首を斬り、魏に伝えた。” 斬之 傳首於魏

“十一年 237 魏に使いを遣わし、改元を賀した。景初元年である。”

遣使如魏 賀改年號 是景初元年 237 也

“十二年 238 魏の太傅の司馬宣が公孫淵を討った。王は主簿の大加と將兵千人を遣わし、助けた。”

魏太傅司馬宣王率衆 討公孫淵 王遣主簿大加 將兵千人助之

新大王五年 169 の記事では大加は官名と思われる。主簿と大加とすべきか。

“十六年 242 王は將を遣わし、遼東郡の西安平を襲破した。”

王遣將 襲破遼東西安平

“十九年 245 三月 ” 東海人が美女を獻じた。王は後宮に入れた。

東海人獻美女 王納之後宮

“十月 兵を出し、新羅の北邊を侵した。”

侵新羅北邊

新羅の初出である。

“二十年 246 八月 魏は幽州刺史母丘儉に將萬人を付けて出撃し、玄菟郡に來侵した。．．．” 魏遣幽州刺史母丘儉 將萬人 出玄菟來侵．．．

“十月 儉は丸都城を攻め陷した。”

儉攻陷丸都城

“二十一年 247 丸都城を復旧することが難しく、平壤城を築いた。．．．”

王以丸都城經亂

不可復都 築平壤城 移民及廟社 平壤者本仙人王儉之宅也 或云王之都王險

平壤は長白山脈の東(南)である。新羅と抗争している状況でなくなった。

“二十二年 248 二月 新羅が使いを遣わし和を結んだ。” 新羅遣使結和

“九月 王が薨かった。柴原に葬り、東川王と号した。”

王薨 葬於柴原 號曰東川王

24.12. 第12代 中川王 中壤王 248-270 然弗

%% A4,,4427 高句麗 05

“東川王二十二年十月 椽氏を王后とした。” 立椽氏爲王后

“十一月 王弟の預物と奢句らが謀叛した。伏誅した。”

王弟預物・奢句等謀叛 伏誅

“三年 250 國相の明臨於漱に知内外兵馬事を兼ねることを命じた。”

王命國相明臨於漱 兼知内外兵馬事

“七年 254 國相の明臨於漱が卒した。沸流沛者陰友を國相とした。”

國相明臨於漱卒 以沸流沛者陰友爲國相

“九年 256 十一月 椽那明臨笏觀尚公主(?)を馬都尉とした。”

以椽那明臨笏觀 尚公主 爲馬都尉

“十二年 259 王は杜訥之谷で狩りをした。魏將尉遲楷名犯長陵諱將兵來伐。王は精騎五千をかき集め、梁貊之谷で戦いこれを破り、斬首は八千餘りであった。” 王敗于杜訥之谷

魏將尉遲楷名犯長陵諱將兵來伐 王簡精騎五千 戰於梁貊之谷 敗之 斬首八千餘級

“十三年 260 王は卒本で、始祖廟を祀った。” 王如卒本 祀始祖廟

即位の直後に行われるのが普通である。高句麗では行わない王もかなりいる。

“二十三年 270 王は薨かった。中川之原に葬り、中川王と号した。”

王薨 葬於中川之原 號曰中川王

13.13. 第13代 西川王 西壤王 270-292 藥盧

%% A4,,4458 高句麗 05

“二年 271 七月 國相の陰友が卒した。”

國相陰友卒

“九月 尚婁を國相とした。尚婁は陰友の子である。”

以尚婁爲國相 尚婁 陰友子也

“七年 276 王は新城で云った：新城は國の東北の大鎮である。”

王如新城 或云 新城 國之東北大鎮也

“十一年 280 肅愼が來侵した。”

肅愼來侵

“十七年 286 王弟の逸友・素勃の2人が謀反した。”

王弟逸友・素勃等二人 謀叛

“二十三年 292 王が薨かった。西川之原に葬り、西川王と号した。”

王薨 葬於西川之原 號曰西川王

13.14. 第14代 烽上王 雉葛王 292-300 相夫（歆矢婁）

% A4,,4480 高句麗 05

“元年 292（訳）”（理解できていない）

殺安國君達賈 王以賈在諸父之行 有大功業 爲百姓所瞻望 故疑之謀殺・・・

“二年 293 慕容が來侵した。王は新城に往って賊を避けることを望んだ。・・・”
慕容來侵 王欲往新城避賊・・・

“三年 294 國相の尚婁が卒した。南部大使の倉助利を國相とし、爵爲を大主簿に進めた。”
國相尚婁卒 以南部大使者倉助利爲國相 進爵爲大主簿

“五年 296 慕容が來侵し、故國原に至った。・・・”

慕容來侵 至故國原・・・

“七年 298 王は宮室を造営した。極めて贅沢であったため、民は飢え困窮した。群臣は諫めたが従わなかった。”

王增營宮室 頗極侈麗 民饑且困 羣臣驟諫 不從

“九年 300 群臣は共謀して、王を廃し、乙弗を迎え王とした。王は免れることが出来ないと知って、自經した。2人の子も従った。烽山之原に葬り、烽上王と号した。”
羣臣同謀

廢之 迎乙弗爲王 王知不免 自經 二子亦從而死 葬於烽山之原 號曰烽上王

次の王と共に 王如卒本 祀始祖廟 の記事が無い。

13.15. 第 15 代 美川王 好壤王 300-331 乙弗（憂弗）

% A4,4480 高句麗 05

“初め、烽上王が弟の咄固が異心を持つことを疑い、これを殺した。子の乙弗は害を恐れ逃げ出した。”

烽上王疑弟咄固有異心 殺之 子乙弗畏害出遁 始就水室村人陰牟家 . . .

“三年 302 王は兵三萬を率い、玄菟郡を侵し、八千人を捕虜とし、平壤に移した。”

王率兵三萬 侵玄菟郡 虜獲八千人 移之平壤

“十二年 311 将を派遣し、遼東郡の西安平を襲い取った。”

遣將襲取遼東西安平

“十四年 313 樂浪郡を侵し、男女二千餘人を捕虜とした。”

侵樂浪郡 虜獲男女二千餘口

“十五年 314 王子の斯由を太子とした。”

立王子斯由爲太子

“九月 南に帶方郡を侵した。”

南侵帶方郡

樂浪郡と帶方郡を侵す記事は初めて。Wikipedia では、この年に帶方郡が滅びた。

“十六年 315 玄菟城を攻め破り、その民を殺獲した。”

攻破玄菟城 殺獲甚衆

“二十年 319 晉の平州刺史の崔毖が出奔して来た。初め、崔毖は自分と段氏・宇文氏共に慕容攻めることを陰で説いた。三國が棘城を進攻した。門を閉ざし、ひとり牛酒をもって宇文氏をねぎらった。二國は宇文氏がはかりごとを持っていると疑い、兵を引き帰った。．．．”

晉平州刺史崔毖來奔 初 崔毖陰説我及段氏・宇文氏 使共攻慕容 三國進攻棘城 閉門自守 獨以牛酒 犒宇文氏 二國疑宇文氏 與有謀 各引兵歸 宇文大人悉獨官曰

“二十一年 320 兵を派遣し遼東郡を寇した。慕容仁は拒戦これを破った。”

遣兵寇遼東 慕容仁拒戦破之

“三十一年 330 後趙の石勒に使いを遣わした。．．．”

遣使後趙石勒 致其矢

“三十二年 331 王は薨かった。美川之原に葬り、美川王と号した。”

王薨 葬於美川之原 號曰美川王

国内記事はない。

13.16. 第16代 故国原王 國上王 300-331 釗（斯由）

%% A4,,4480 高句麗 06

“二年 332 二月 王は卒本で、始祖廟を祀った。” 王如卒本 祀始祖廟

“三月 王は卒本より至った。” 至自卒本

“四年 334 平壤城を増築した。” 増築平壤城

“五年 335 國北に新城を築いた。” 築國北新城

“六年 336 晋に使いをおくり方物を貢いた。” 遣使如晉貢方物

“九年 339 燕王が來侵した。兵と新城を。王は同盟を乞うた。還った。” 燕王來侵 兵及新城 王乞盟 乃還

“十年 342 王は世子を遣わして、燕王に朝した。” 王遣世子 朝於燕王

“十二年 342 二月 葺丸城を修復し、國內城を築いた。” 修葺丸城 又築國內城

“八月 丸都城に居を移した。” 移居丸都城

首都は 丸都城と平壤城の二都体制か。

“十月 燕王は龍城に遷都した。立威將軍の翰が高句麗を先取することを請うた。後に宇文をその後中原可圖滅ぼした。高句麗には二道がある。北道は平けてひろい。南道は險しく狭い。衆は北道を欲したが、翰はい

った・・・。”

燕王遷都龍城 立威將軍翰請先取高句麗 後滅宇文

然後中原可圖 高句麗有 二道 其北道平闊 南道險狹 衆欲從北道 翰曰・・・

“十一月 兵四萬南道を出た。慕容翰と慕容霸を前鋒とし、・・・。”

自將勁兵四萬 出南道 以慕容翰・慕容霸爲前鋒 別遣長史王等 將兵萬五千 出北道以來侵 王遣弟武 帥精兵五萬 拒北道 自帥羸兵 以備南道 慕容翰等先至戰 以大衆繼之 我兵大敗

“十三年 343 二月 王は弟を遣わし、臣と称し燕に入朝し、珍異千數を貢いだ。”

王遣其弟 稱臣入朝於燕 貢珍異以千數

“七月 平壤東黃城に居を移した。城は今の西京東木覓山中にある。”

移居平壤東黃城 城在今西京東木覓山中 遣使如晉朝貢

“使いを遣わし晉に朝貢した。”

遣使如晉朝貢

“十五年 345 燕王は慕容恪を使とした來攻し、南蘇を抜き、戍を置き還った。”

燕王使慕容恪來攻 拔南蘇 置戍而還

“十九年 349 王は前の東夷護軍の宋晃子を燕に送った。燕王はこれを赦し、・・・。”

王送前東夷護軍宋晃子燕 燕王雋赦之 更名曰活 拜爲中尉

“二十五年 355 王は使いを燕に遣わし、納質修貢し、その母を請うた。燕王はこれを赦し、殿中將軍の龕を遣わし、王母の周氏を送り歸した。

王を征東大將軍營州刺史とし、以前のように樂浪公王に封じた。”

王遣使詣燕 納質修貢 以請其母 燕王雋許之 遣殿中將軍龕 送王母周氏歸國 以王爲征東大將軍營州刺史 封樂浪公王如故

“三十九年 369 王は兵二萬をもって百濟を南伐した。雉壤で戦ったが、
敗れた。” 王以兵二萬 南伐百濟 戰於雉壤 敗績

百濟との戦闘の最初の記事である。これ以後百濟とは継続的に戦うことになる。

“四十年 370 秦王の猛は燕を伐ち、これを破った。燕の太傅の慕容評は
出奔して来たが、王は秦に送った。”

秦王猛 伐燕破之 燕太傅慕容評來奔 王執送於秦
燕とは友好的ではなかったのか。

“四十一年 371 十月 百濟王は兵三萬を率いて、平壤城を攻めてきた。王
はこれに対し出師したが、流矢にあたり、”

百濟王率兵三萬 來攻平壤城 王出師拒之 爲流矢所中
“この月の二十三日に薨かった。” 是月二十三日 薨

“この月、故國之原に葬った。百濟の蓋鹵王はいった・・・。”

葬于故國之原 百濟蓋鹵王表魏曰 梟斬釗首 過辭也

上記記事の意味は掴めていない。

蓋鹵王の在位は 455 年から 475 年であり上記記年とは 100 年程のズレがある。371 年の百濟の王は近尚古王である。

国内記事は少ない。

13.17. 第 17 代 小獸林王，小解朱留王 371-384 丘夫

%% A4,,4637 高句麗 06

“二年 372 秦王の苻堅は使いと僧の順道を遣わし、佛像と經文を送った。王は感謝の使いを遣わし、方物を貢いだ。大學を造り子弟の教育をした。”

秦王苻堅

遣使及浮屠順道 送佛像經文 王遣使廻謝 以貢方物 立大學 教育子弟

“三年 373 律令制を始めた。”

始頒律令

“四年 374 僧阿道が来た。”

僧阿道來

“五年 375 二月 肖門寺を創建し順道を置いた。また、伊弗蘭寺を創建し阿道を置いた。これは海東の佛法の始めである。”

始創肖門寺 以置順道 又創伊弗蘭寺 以置阿道 此海東佛法之始

“七月 百濟の水谷城を攻めた。”

攻百濟水谷城

高句麗への仏教の公伝である。

“六年 376 百濟の北鄙を攻めた。”

侵百濟北鄙

“七年 377 百濟の將兵三萬が平壤城を來侵した。”

百濟將兵三萬 來侵平壤城

“十一月 百濟を南伐した。”

南伐百濟

“使いを苻秦に遣わし朝貢した。”

遣使入苻秦朝貢

“八年 378 契丹が北邊を犯し、八部落を陷した。” 契丹犯北邊 陷八部落

“十四年 384 王は薨かった。小獸林に葬り、小獸林王と号した。”

王薨 葬於小獸林 號爲小獸林王

上記以外の国内記事は無し。

13.18. 第18代 故國壤王 384-39 伊連（於只支）

% A4, ,4676 高句麗 06

“二年 385 六月 王は兵四萬で遼東郡を襲った。先是、燕王の垂は帶方王の佐に龍城を鎮めるように命じた。佐は我軍が遼東郡を襲ったことを聞き、司馬景を遣わしこれを救わせた。我軍はこれを擊敗し、遼東郡と玄菟郡を陥れた。”

王出兵四萬 襲遼東 先是 燕王垂命

帶方王佐 鎮龍城 佐聞我軍襲遼東 遣司馬景 將兵救之 我軍擊敗之 遂陷遼東・玄菟

“十一月 燕の慕容農の將兵が來侵し、遼東・玄菟二郡を取り戻した。初め、幽・冀州の流民が多数來投した。農は范陽淵を遼東太守とし、これを帰順させた。”

燕慕容農將兵來侵

復遼東・玄菟二郡 初 幽・冀流民多來投 農以范陽淵爲遼東太守 招撫之

“三年 386 正月 王子談德を太子とした。”

立王子談德爲太子

“王は兵を發し、百濟を南伐した。”

王發兵 南伐百濟

“六年 389 百濟が來侵し、南鄙の部落を略奪し、歸った。”

百濟來侵 掠南鄙部落而歸

“七年 390 百濟は達率の眞嘉謨を遣わし、都押城を攻め破り、二百人を捕虜として歸った。”

百濟遣達率眞嘉謨 攻破都押城 虜二百人以歸

“八年 391 新羅に修好の使いを遣わした。新羅王は姪の實聖を質として遣わした。”

遣使新羅修好 新羅王遣姪實聖爲質

“三月 崇信佛法求福を下教し、有司に國社を立て、宗廟を修復するよう
に命じた。”

下教 崇信佛法求福 命有司 立國社 修宗廟

“五月 王が薨かった。故國壤に葬り、國壤王と号した。”

王薨 葬於故國壤 號爲故國壤王

13.19. 第19代 廣開土王 391-412 談德

% A4,,4711 高句麗 06

“故國壤王八年(廣開土王元年)391 七月 百濟を南伐し、十城を抜いた。”

南伐百濟 抜十城

“九月 契丹を北伐し、男女五百人を捕虜とした。また、陷没の民一萬人を本国に招諭し、帰った。”

北伐契丹 虜男女五百口 又招諭本國陷没民口一萬而歸

“十月 百濟の關彌城を攻め陷した。其城四面峭絶 海水環繞。王は郡を七道に分け、二十日間攻撃し、抜いた。”

陷百濟關彌城 其城四面峭絶 海水環繞 王分軍七道 攻撃二十日 乃拔

“二年 392 百濟が南邊を侵した。將に命じこれを阻んだ。”

百濟侵南邊 命將拒之

“平壤に九寺を造った。”

創九寺於平壤

“三年 393 七月 百濟が來侵した。王は精騎五千を率いて、これを逆撃した。”

百濟來侵 王率精騎五千 逆擊敗之 餘寇夜走

“八月 國南に七城を築き、百濟の侵攻に備えた。”

築國南七城 以備百濟之寇

“四年 394 王は百濟と海戦をし、大勝し、八千餘りの捕虜を得た。”

王與百濟戰於水之上 大敗之 虜獲八千餘級

“九年 399 正月 王は燕に使いを遣わし、朝貢した。” 王遣使入燕朝貢

“二月 燕王は強盛で、我が王の礼がなっていないとして、將兵三萬で襲ってきた。驃騎大將軍慕容熙を前鋒とし、新城・南蘇の二城を抜き、七百餘里にわたって領土を拓げた。五千餘戸が還ってきた。”

燕王盛 以我王禮慢 自將兵三萬襲之 以驃騎大將軍慕容熙爲前鋒 拔新城・南蘇二城 拓地七百餘里 徙五千餘戸而還

“十一年 401 王は兵を派遣し宿軍を攻めた。燕の平州刺史の慕容歸は城を棄て逃走した。” 王遣兵攻宿軍 燕平州刺史慕容歸 棄城走

“十三年 403 兵を出し燕を侵した。” 出師侵燕

“十四年 404 燕王の熙が遼東城を來攻し、陥れた。．．．(訳)”

燕王熙來攻遼東城 且陷 熙命將士 毋得先登 俟平其城 朕與皇后乘而入 由是 城中得嚴備 卒不克而還

“十五年 405 十二月 燕王の熙が契丹を襲った。．．．(訳)”

燕王熙襲契丹 至北 畏契丹之衆 欲還 遂棄輜重 輕兵襲我 燕軍行三千餘里 士馬疲凍 死者屬路 攻我木底城 不克而還

“十六年二月 宮廷を増修した。” 増修宮闕

“十七年 407 北燕に使いを遣わした。．．．(訳)”

遣使北燕 且叙宗族 北燕王雲 遣侍御史李拔報之 雲祖父高和 句麗之支庶 自云高陽氏之苗裔 故以高爲氏焉 慕容寶之爲太子 雲以武藝 侍東宮 寶子之 賜姓慕容氏

北燕は 407 年から 436 年。

“十八年 408 國東の禿山などに六城を築き、平壤の民を移した。”

築國東禿山等六城 移平壤民戸

“二十二年 412 王が薨かり、廣開土王と号した。” 王薨 號爲廣開土王

国内記事は少なく、殆どが対外記事。

中国では、北は五胡十六国、南は東晋。北魏は 386 年から 534 年。宋は 420 年から 479 年。

国力が充実したのか、西と南を攻略しだした。中国は、東晋と十六国の時代で、最も圧力の弱い時代か。高句麗の最大版図かもしれない。

check 中国、秦が衰退

この王の時代 398-416 に倭王讃が晋に朝貢した。倭王が爵位を求めたのは、高句麗に倣ったのか。

対中国記事は燕だが、禮を責められ、戦争になっている。朝貢の気はなかったか。この燕は後燕 384-407 か。北燕は 407-436。主に遼西地方を領有した。

碑文の好太王である。東・南・西と侵略している。中国が分裂状態でその圧力が弱かった。

倭の記事が全くない。日本書紀からも、百済の援護に留まっていたせいか。

13.20. 第 20 代 長壽王 416-491 璉（巨連）

% A4, , 4803 高句麗 06

“元年 416 長史の高翼を晉に遣わして奉表し、白馬を獻じた。安帝は王を高句麗王樂浪郡公に封じた。”

遣長史高翼入晉奉表 獻赭白馬 安帝封王高句麗王樂浪 郡公

“十二年 427 新羅が修聘の使を遣わした。王はこれをねぎらい、厚くもてなした。”

新羅遣使修聘 王勞慰之特厚

“十三年 428 魏に使いを遣わし朝貢した。”

遣使如魏朝貢

北魏は 386 年から 534 年。世祖は第 3 代の太武帝。431 年に夏を滅ぼし、ほぼ華北を統一した。統一の完成は 442 年で、ここから南北朝になる。北魏帝国としての都は 493 年までは平城(現在の山西省大同市)でその後は洛陽である。雲崗石窟と龍門石窟はこの時代に造られた。

南朝の宋は 420 年から 479 年。

“十五年 430 平壤に都を移した。”

移都平壤

“二十三年 438 六月 王は魏に使いを遣わし朝貢した。”

王遣使入魏朝貢

“(上に続き) 國諱を要請した。世祖はその真心を誉め、使帝系及諱以與之。員外散騎侍郎の李敖を派遣し、王を都督遼海諸軍事征東將軍領護東夷中郎將遼東郡開國公高句麗王となした。

且請國諱 世祖嘉其誠款 使帝系及諱以與之 遣員外散騎侍郎李敖 拜王爲都督遼海
諸軍事征東將軍領護東夷中郎將遼東郡開國公高句麗王

“秋 王は魏に使いを遣わし謝恩した。”

王遣使入魏謝恩

“魏人は燕を何回も伐した。燕日危蹙。燕王の馮弘はいった・・・”

魏人數伐燕 燕日危蹙 燕王馮弘曰 若事急 且東依高句麗 以圖後舉 密遣尚書陽伊
請迎於我

“二十四年 439 燕王は使いを遣わし魏に貢ぐ、子を送るように要請し
た。魏はこれを許さず、兵を挙げてこれを討った。・・・”

燕王遣使入貢于魏 請送侍子 魏主不許 將舉兵討之 遣使來告諭

“四月 魏は燕の白狼城を攻め、克った。王は將の葛盧・孟光と數萬を派
遣した。隨陽伊 和龍に至った。燕王を迎え、葛盧・孟光は入城し
た。・・・”

魏攻燕白狼城 克之 王遣將葛盧・孟光 將衆數萬 隨陽伊至 和龍 迎燕王 葛盧・
孟光入城 命軍脫弊褐 取燕武庫精仗 以給之 大掠城中

“五月 燕王率龍城見戸東徙 宮殿を焼いた。火はしばらく消えなかつ
た。”

燕王率龍城見戸東徙 焚宮殿 火一旬不滅

“王は魏に使いを遣わし奉表した。”

王遣使入魏奉表

“二十六年 441 初め、燕王弘が遼東に至ったとき、王は使いを遣わして
ねぎらっていった・・・”

初 燕王弘至遼東 王遣使勞之曰

“宋に使いを遣わし・・・(訳)。”

遣使如宋 上表求迎 宋太祖遣使者王白駒等迎之 并令我資送

“三十八年 453 新羅人が邊將を襲い殺した。王は怒って兵を挙げてこれを討とうとしたが、羅王が使いを遣わし謝罪したので、これを止めた。”
新羅人襲殺邊將 王怒 將舉兵討之 羅王遣使謝罪 乃止

“四十二年 457 新羅の北邊に兵を派遣し侵した。” 遣兵侵新羅北邊

“五十一年 466 宋の世祖孝武帝は王を車騎大將軍開府儀同三司とした。”
宋世祖孝武皇帝策王爲車騎大將軍開府儀同三司

車騎大將軍は驃騎大將軍につぐ將軍位。

“五十六年 471 二月 王は靺鞨の兵一萬で新羅の悉直州城を攻め取った。”
王以靺鞨兵一萬 攻取新羅悉直州城

高句麗本紀の記事としては靺鞨の初出である。

“五十七年 472 八月 百濟兵が南の田舎に侵入した。” 百濟兵侵入南鄙

“五十九年 474 民奴久らは魏に奔降した。各々は田宅を賜った。これは、魏の高祖延興元年のことである。”

民奴久等奔降於魏 各賜田宅 是魏高祖延興元年也

“六十三年 478 九月 王は兵三萬を率いて百濟を侵し、王都の漢城を陥れ、その王夫餘慶を殺し、男女八千人を捕虜として帰った。”

王帥兵三萬 侵百濟 陷王所都漢城 殺其王夫餘慶 虜男女八千而歸

“六十六年 481 百濟の燕信が投降してきた。” 百濟燕信來投

“六十八年 483 南齊の太祖蕭道成は王を驃騎大將軍とした。王は餘奴らを南齊へ遣わせた。魏の光州人が海中で餘奴らを得て、都に送った。魏の高祖はいった。・・・(訳)”

南齊太祖蕭道成策王爲驃騎大將軍 王遣使餘奴等 朝聘南齊 魏光州人 於海中得餘奴等 送闕 魏高祖 詔責王曰 道成親弑其君 竊號江左 朕方欲興滅國於舊邦 繼絕世於劉氏 而卿越境外交 遠通篡賊 豈是藩臣守節之義 今不以一過掩卿舊款 即送還藩 其感恕思愆 祇承明憲 輯寧所部 動靜以聞

遭難したのか。

“七十二年 487 十月 このとき、魏人が謂った：我方が強く、諸國に使邸を置いている。齊使を第一に、我が使者はその次に。”

時 魏人謂我方強 置諸國使邸 齊使第一 我使者次之

“七十七年 492 九月 新羅の北邊に兵を派遣し侵し、狐山城を陥れた。”

遣兵侵新羅北邊 陷狐山城

“七十九年 494 王は薨かった。98 歳であった。長壽王と号した。魏の孝文帝はこれを聞き、・・・車騎大將軍太傅遼東郡開國公高句麗王を追贈した。”

王薨 年九十八歳 號長壽王 魏孝文聞之 制素委貌布深衣 舉哀於東郊 遣謁者僕射 李安上 策贈車騎大將軍太傅遼東郡開國公高句麗王

次の王と共に、朝貢の多い王(?最多)である。朝貢のみの記事はまとめた。対外攻略の記事は殆ど無い。

記事にでてくる魏は三国魏ではなく北魏{¥small 386-534}で主な朝貢先である。他にも南朝の宋{¥small 420-479}と南齊にも朝貢している。次の王と共に、朝貢の多い王(?最多)である。

北魏に朝貢し、その援助で燕を滅ぼした。これ以外の抗争は百済と新羅が相手である。燕が滅びれば、北魏は東に矛先を向ける余裕はなく、安心して南の攻略が出来ることになる。

遣使入魏朝貢 魏に使いを遣わし朝貢した。

二十五年 440 二月	二十七年 442 十一月 十二月
五十年 465 三月	五十三年 468 二月
五十四年 469 三月	五十伍年 470 二月
五十六年 471 四月	五十七年 472 二月
五十八年 473 二月	六十年 475 二月 七月
六十一年 476 二月 七月	六十二年 477 七月
六十三年 478 二月 八月	六十四年 479 二月 八月 九月
六十五年 480 二月 九月	六十七年 482 三月 九月
七十二年 487 十月	七十三年 488 五月

七十四年 489 四月

七十五年 490 五月

七十六年 490 二月 四月 閏八月

七十七年 492 二月 六月 十月

七十八年 493 七月 九月

七十九年 494 五月 九月

遣使入宋朝貢

宋に使いを遣わし朝貢した。

四十三年 458

六十二年 477 七月

六十六年 481

遣使南齊朝貢

南齊に使いを遣わし朝貢した。

六十九年 484

13.21. 文咨明王 明治好王 491-519 雲（羅雲）

%% A4,,4973 高句麗 07

“父王子は古鄒大加の助多で、助多は早死にしたため、長壽王は宮中で養われた。” 父王子古鄒大加助多 助多早死 長壽王養於宮中

“元年 491 魏の孝文帝は使いを遣わし、王を使持節都督遼海諸軍事征東將軍 領護東夷中郎將遼東郡開國公高句麗王とした。” 魏孝文帝遣使拜王爲使持節都督遼海諸軍事征東將軍 領護東夷中郎將遼東郡開國公高句麗王

“三年 493 二月 夫餘王の及妻孥は國を挙げて來降した。”

夫餘王及妻孥 以國來降

“七月 我軍と新羅人が薩水之原で戦った。羅人が敗れ、犬牙城を保った。我が兵はこれを囲んだ。百濟が兵三千を派遣し、新羅を援けたので、我が兵は退いた。” 我軍與新羅人 戰於薩水之原 羅人敗 保犬牙城 我兵圍之 百濟遣兵三千 援新羅 我兵引退

この後暫くは百濟と新羅は助け合っている。新羅が小さく、利害の対立は少なかったのが原因であろう。新羅は倭の残存勢力を下して大きくなっていく。

“齊帝は王を使持節散騎常侍都督 營平二州征東大將軍樂浪公とした。”

“四年 494 七月（訳）” 南巡狩 望海而還

“八月 兵を派遣し百済の雉壤城を囲んだ。百済は新羅に救援を要請し、
羅王は將軍德智に兵を率いて救援することを命じた。我が軍は退き帰っ
た。” 遣兵圍百済雉壤城 百済請救於新羅 羅王命將軍德智 率兵來援 我軍退還

“五年 495 齊帝は王を車騎將軍に進めた。” 齊帝進王爲車騎將軍

“七月 兵を派遣し、新羅の牛山城を攻めた。新羅は兵を泥河に出撃させ
た。我が軍は敗北した。” 遣兵攻新羅牛山城 新羅兵出撃泥河上 我軍敗北

“六年 496 八月 兵を派遣し、新羅の牛山城を攻め、これを取った。”

遣兵攻新羅牛山城 取之

“七年 497 七月 金剛寺を創った。” 創金剛寺

“八年 498 百済の民は饑え、二千人が來投した。” 百済民饑 二千人來投

“十一年 501 十月 梁の高祖が即位した。四月 王を車騎大將軍に進め
た。” 梁高祖即位 四月 進王爲車騎大將軍

“十一月 百済が辺境を犯した。” 百済犯境

“十二年 502 百済が達率の優永に兵五千をつけて派遣し、水谷城を來侵
した。” 百済遣達率優永 率兵五千 來侵水谷城

“十三年 503 四月 魏に使いを遣わし朝貢した。世宗は使いの悉弗を東堂
で引見した。・・・（訳）”

遣使入魏朝貢 世宗引見其使悉弗於東堂 悉弗進曰 小國係誠天極 累葉純誠 地產
土毛 無愆王貢 但黃金出自扶餘 珂則涉羅所產 扶餘爲勿吉所逐 涉羅爲百濟所并 二
品所以不登王府 實兩賊是爲 世宗曰 高句麗世荷上將 專制海外 九夷點虜 悉得征之
瓶恥 誰之咎也 昔方貢之愆 責在連率 卿宜宣朕志於卿主 務盡威懷之略 揃披害羣
輯寧東裔 使二邑還復舊墟 土毛無失常貢也

世宗は3代太武帝。

“十五年 505 十一月 將を派遣し百濟を伐った。大雪で士卒が凍え還った。”

遣將伐百濟 大雪 士卒凍斃而還

“十六年 506 十月 王は將の高老と靺鞨謀を派遣し、百濟の漢城を攻めることを望んだ。横岳下に進み集まった。百濟は兵を出し逆襲した。よって退いた。”

王遣將高老 與靺鞨謀 欲攻百濟漢城 進屯於横岳下 百濟出師逆戰 乃退

“十七年 507 梁の高祖はいった・・・(訳)”

梁高祖下詔曰：高句麗王樂浪郡公某 乃誠款著 貢驛相尋 宜豐秩命 式弘朝典 可
撫軍一作東大將軍開府儀同三司

“十九年 509 九月 百濟を犯し、加弗・圓山の二城を陥れ、男女一千餘人を捕虜とした。”

侵百濟 陷加弗・圓山二城 虜獲男女一千餘

“二十八年 518 王は薨かった。文咨明王と号した。魏の靈太后は東堂で哀れみ、車騎大將軍追贈の使いを遣わした。このとき、魏の肅宗は十歳

で、太后が稱制していた。”

王薨 號爲文咨明王

魏靈太后舉哀於東堂 遣使策贈車騎大將軍 時魏肅宗年十歲 太后臨朝稱制

前王と同様に、対中は従順に努め、国勢の増強と南への攻略と主とした。

遣使入魏朝貢 魏に使いを遣わし朝貢した。

元年 491 六月 八月 十月

三年 493 正月 七月

四年 494 二月 五月

五年 495 五月

七年 497 八月

九年 499 八月

十年 500 正月 十二月

十一年 501 十二月

十五年 505 九月

十六年 506 十月

十七年 507 五月 十二月

十八年 508 五月

十九年 509 閏六月 十二月

二十一年 511 五月

二十二年 512 正月 五月 十二月

二十三年 513 十一月

二十三年 513 十一月

二十四年 514 十月

二十五年 515 四月

二十六年 516 四月

二十七年 517 二月 四月 五月

遣使入齊朝貢 齊に使いを遣わし朝貢した。

五年

遣使入梁朝貢 梁に使いを遣わし朝貢した。

二十一年 511 三月

13.22. 第 22 代 安藏王 519-531 安（興安）

%% A4,,5094 高句麗 07

“二年 520 二月 梁の高祖は王を寧東將軍都督營平二州諸軍事高句麗王に封じた。”
梁高祖封王爲寧東將軍都督 營平二州諸軍事 高句麗王

“江注盛を使いに遣わし、王衣冠劔佩を賜った。”

遣使者江注盛 賜王衣冠劔佩

“魏兵が海中でこれを執り、洛陽に送った。魏は王を安東將軍領護東夷校尉遼東郡開國公高句麗王に封じた。”

魏兵就海中執之 送洛陽 魏封王爲安東將軍領護東夷校尉遼東郡開國公 高句麗王

“三年 521 四月 王は卒本に幸し、始祖廟を祀った。” 王幸卒本 祀始祖廟

“五月 王は卒本よりかえった。通った邑に貧乏な人がいたので、穀を 3 斛賜った。”
王至自卒本 所經州邑貧乏者 賜穀人三斛

“五年 523 八月兵を派遣し、百済を侵した。” 遣兵侵百済

“十一年 529 三月 王は黄城の東で狩りをした。” 王畋於黄城之東

“十月 王は五谷で百済と戦い、これに克ち、二千餘級を殺獲した。”

王與百済戰於五谷 克之 殺獲二千餘級

“十三年 531 五月 王は薨かった。安臧王と号した。これは、梁の中大通三年、魏の普泰元年である。”

王薨 號爲安臧王 是梁中大通三年 魏普泰元年也

“梁書では、安臧王は在位八年で普通七年卒と言っているが、誤りである。”

梁書云 安臧王在位第八年 普通七年 526 卒 誤也

遣使入梁朝貢 梁に使いを遣わし朝貢した。

二十五年 515 四月

二十六年 516 四月

二年 520 正月 九月

八年 526 三月

九年 527 十一月

五年 523 十一月 遣使朝魏 進良馬十匹

魏に使いを遣わし、良馬十匹を進呈した。

13.23. 第23代 安原王 531-545 延（寶延）

% A4,,5137 高句麗 07

“安臧在位十三年 安臧王は薨った。子が無かったため即位した。梁の高祖は爵位を継ぐことを伝えた。” 薨 無嗣子 故即位 梁高祖下詔襲爵

“二年 532 魏帝は使持節散騎常侍領護東夷校尉遼東郡開國公高句麗王とした。” 魏帝詔策使持節散騎常侍領護東夷校尉遼東郡開國公 高句麗王

“四年 534 東魏は驃騎大將軍を加増した。” 東魏詔加王驃騎大將軍
北魏が分裂し 534 年に成立した。

“十年 540 九月 百濟は牛山城を囲んだ。王は精騎五千を派遣し、これを撃走させた。” 百濟圍牛山城 王遣精騎五千 撃走之

“十五年 545 王は薨かった。安原王と号した。これは梁の大同十一年、東魏の武定三年である。” 王薨 號爲安原王 是梁大同十一年 東魏武定三年也

“梁書では、安原は太清二年卒、その子を寧東將軍高句麗王樂浪公としたといっているが、誤りである。”

梁書云 安原以太清二年卒 以其子爲寧東將軍高句麗王樂浪公 誤也

この王も朝貢がかなり多い。朝貢の多い王は、他との抗争が少ない。
朝貢以外の記事は少なく、平穩の時代であったようだ。

前王とともに、末尾で引用している正史が梁書である。位置も近く朝貢の回数も多い魏書ではない。

遣使入梁朝貢 梁に使いを遣わし朝貢した。

二年 532 四月 十一月

五年 535 二月

十一年 541 三月

遣使入魏朝貢 魏に使いを遣わし朝貢した。

二年 532 六月

三年 533 二月

四年 534

遣使入東魏朝貢 東魏に使いを遣わし朝貢した。

六年 536 八月

七年 537 十二月

九年 538 五月

十年 540 十二月

十二年 542 十二月

十三年 543 十一月

十四年 544 十一月

13.24. 第 24 代 陽原王 陽崗上好王 545-559 成（平成）

%% A4,,5197 高句麗 07

“三年 547 七月 白巖城を改築し、新城を葺いた。” 改築白巖城 葺新城

“四年 548 正月 兵六千で百濟の獨山城を攻めた。新羅の將軍朱珍が來援したため、克てず、退いた。”

以兵六千攻百濟獨山城 新羅將軍朱珍來援 故不克而退

“六年 550 正月 百濟が來侵し、道薩城を陥れた。” 百濟來侵陷道薩城

“三月 百濟の金城を攻めた。新羅人はこれに乗じて、二城を取った。”

攻百濟金城 新羅人乘間取二城

“九月 北齊は王を使持節侍中驃騎大將軍領護東夷校尉遼東郡開國公高句麗王に封じた。”

北齊封王爲使持節侍中驃騎大將軍 領護東夷校尉遼東郡開國公高句麗王

“七年 551 九月 突厥が新城を囲んだが克てず、白巖城に移り攻めた。王は將軍高と兵一萬を派遣し、これを拒み、一千餘級を殺獲した。新羅は來攻し、十城を取った。” 突厥來圍新城

不克 移攻白巖城 王遣將軍高領兵一萬 拒克之 殺獲一千餘級 新羅來攻取十城

“八年 552 長安城を築いた。” 築長安城

“十年 554 百濟の熊川城を攻めたが、克てなかった。” 攻百濟熊川城 不克

“十三年 558 十月 丸都城の朱理が叛いたので誅した。”

“十五年 560 三月 王が薨勝った。陽現王と号した。” 王薨 號爲陽原王

遣使入東魏朝貢 東魏に使いを遣わし朝貢した。

元年 545 十二月

二年 546 十一月

三年 547 七月

遣使入北齊朝貢 北齊に使いを遣わし朝貢した。

六年 550 六月

七年 551 五月

十一年 556 十一月

13.25. 第 25 代 平原王 平崗上好王 559-590 湯（陽成）

%% A4,,5197 高句麗 07

“王は卒本に幸して、始祖廟を祀った。” 王幸卒本 祀始祖廟

第 16 代 故国原王 332 以来。行われなかったのか、書き忘れか？

“四年 562 二月 陳の文帝は王に寧東將軍を授けた。”

陳文帝詔授王寧東將軍

“十九年 577 周の高祖は開府儀同三司大將軍遼東郡開國公高句麗王とした。” 周高祖拜王を王爲開府儀同三司大將軍 遼東郡開國公高句麗王

“二十六年 584 春 隋に使いを遣わし朝貢した。四月 隋の文帝は大興殿で我が使者をもてなす宴を開いた。”

遣使入隋朝貢 四月 隋文帝宴我使者於大興殿

隋が初めて現れる。581 年は隋建国の年である。

“二十八年 586 長安城に遷都した。” 移都長安城

“三十二年 590 王は陳が滅びるのを聞いて、大いに懼れた。兵を鍛え食料を蓄えて守りに備えた。隋の高祖は王に璽書を賜った。”

王聞陳亡大懼 治兵積穀爲拒守之策 隋高祖賜王璽書

“十月 薨かった。平原王と号した。これ開皇十年である。隋書と通鑑書では高祖が璽書を賜ったのは開皇十七年とあるが、誤りである。”

薨 號曰平原王 是開皇十年 隋書及通鑑書 高祖賜璽書於開皇十七年 誤也

遣使入陳朝貢 陳に使いを遣わし朝貢した。

三年 561 十一月

八年 566 十二月

十二年 570 十一月

十三年 571 二月

十六年 574 正月

二十七年 585 十二月

遣使入北齊朝貢 北齊に使いを遣わし朝貢した。

六年 564

七年 565 正月

十五年 573

遣使入周朝貢 周に使いを遣わし朝貢した。

十九年 577

遣使入隋朝貢 隋に使いを遣わし朝貢した。

二十三年 581 十二月

二十四年 582 正月 十一月

二十五年 583 正月 四月 冬

13.26. 第 26 代 嬰陽王 平陽王 590-618 元（大元）

% A4, , 5309 高句麗 08

“即位 590 隋の文帝は王を上開府儀同三司襲爵遼東郡公とする使いを遣わした。” 隋文帝遣使拜王爲上開府儀同三司 襲爵遼東郡公

“二年 591 正月 隋に使いを遣わし朝貢した。謝恩を奉表し、冊封を要請した。帝はこれを許した。” 遣使入隋 奉表謝恩進奉 因請封王 帝許之

“三月 高句麗王に封ぜられ、車服を賜った。” 策封爲高句麗王 仍賜車服

“五月 使いを遣わし謝恩した。” 遣使謝恩

“三年 592 正月 隋に使いを遣わし朝貢した。” 遣使入隋朝貢

“八年 597 五月 隋に使いを遣わし朝貢した。” 遣使入隋朝貢

“九年 598 二月 王は王靺鞨の衆萬餘を率いて遼西を侵した。營州摠管の韋冲はこれを撃退した。隋の文帝はこれを聞いて、大いに怒り、漢王諒と王世積に元帥を命じ、水陸三十萬で來伐した。”

王率靺鞨之衆萬餘 侵遼西 營州摠管韋冲撃退之 隋文帝聞而大怒 命漢王諒・王世積並爲元帥 將水陸三十萬來伐

“六月（訳）”

帝下詔黜王官爵 漢王諒軍出臨渝關 值水餽轉不繼 軍中乏食 復遇疾疫 周羅自東泛海 趣平壤城 亦遭風 多漂沒

靺鞨が現れるのは3回目である。全て傭兵的な存在として扱われている。本章で取り挙げた靺鞨の現れる記事は記事次である。

長壽王五十六年 471 二月 王以靺鞨兵一萬 攻取新羅悉直州城

文咨明王十六年 506 十月 王遣將高老 與靺鞨謀 欲攻百濟漢城 進屯於橫岳下 百濟出師逆戰 乃退

嬰陽王九年 598 二月 王率靺鞨之衆萬餘 侵遼西 營州摠管韋冲擊退之 隋文帝聞而大怒 命漢王諒・王世積並爲元帥 將水陸三十萬來伐（本記事）

寶藏王十三年 654 十月 王遣將安固出師及靺鞨兵 契丹 松漠都督李窟哥禦之 大敗我軍於新城

寶藏王十四年 655 正月 先是 我與百濟靺鞨 侵新羅北境 取三十三城 新羅王金春秋 遣使於唐求援

寶藏王二十年 661 五月 王遣將軍惱音信 領靺鞨衆 圍新羅北漢山城 浹旬不解 新羅餉道絕 城中危懼 忽有大星落於我營 又雷雨震 惱音信等 疑駭引退

Wikipedia「靺鞨」には、

靺鞨は、中国の隋唐時代に中国東北部、沿海州に存在した農耕漁労民族。南北朝時代における勿吉の表記が変化したものであり、肅慎、ユウ婁の末裔である。16部あったが、後に高句麗遺民と共に渤海国を建国した南の粟末部と、後に女真族となって金朝、清朝を建国した北の黒水部の2つが主要な部族であった。

と書かれている。

“九月 隋軍が還った。使者は十中八九であった。王は恐れて、謝罪の使いを遣わした。・・・百濟王の昌は使いを遣わし奉表した：・・・ 帝は勅諭した：・・・”

師還 死者十八九 王亦恐懼 遣使謝罪 上表稱 遼東冀土臣某 帝於是罷兵 待之如初 百濟王昌遣使奉表 請爲軍導 帝下詔諭以 高句麗服罪 朕已赦之 不可致伐 厚其使而遣之 王知其事 侵掠百濟之境

“十一年 600 隋に使いを遣わし朝貢した。大學博士の李文眞を招き、古史を新集五卷にした。国で初めての文字の使用である。”

遣使入隋朝貢 詔大學博士李文眞 約古史爲新集五卷 國初始用文字時

古史はどんな形で伝承したのか。文意からは文字で書かれていたように捉えられる。

“十四年 603 王は將軍高勝を派遣して、新羅の北漢山城を攻めた。羅王は兵を率いて漢水を過ぎ、城中は太鼓をたたき応じた。人数で負けていることを恐れ、退いた。”

王遣將軍高勝

攻新羅北漢山城 羅王率兵過漢水 城中鼓噪相應 勝以彼衆我寡 恐不克而退

“十八年 607 (訳)”

初 煬帝之幸啓民帳也 我使者在啓民所 啓民不敢隱 與之見帝 黃門侍郎裴矩說帝
曰 高句麗本箕子所封之地 漢晉皆爲郡縣 今乃不臣 別爲異域 先帝欲征之久矣 但楊
諒不肖 師出無功 當陛下之時 安可不取 使冠帶之境 遂爲蠻貊之鄉乎 今其使者 親
見啓民 舉國從化 可因其恐懼 脅使入朝 帝從之 牛弘宣旨曰 朕以啓民誠心奉國 故
親至其帳 明年當往郡 爾還日 語爾王 宜早來朝 勿自疑懼 存育之禮 當如啓民 苟或
不朝 將帥啓民 往巡彼土 王懼藩禮頗闕 帝將討之 啓民 突厥可汗也 夏五月 遣師攻
百濟松山城 不下 移襲石頭城 虜男女三千而還

“十九年 608 二月 將に命じ新羅の北境を襲わせ、八千人を捕虜とし
た。”

命將襲新羅北境 虜獲八千人

“四月 新羅の牛鳴山城を抜いた。”

拔新羅牛鳴山城

“二十二年 611 煬帝は高句麗を討つように下令した。” 煬帝下詔 討高句麗

“四月 車駕が(遼東)郡の臨朔宮に至り、四方の兵が皆郡に集まった。”

車駕至郡之臨朔宮 四方兵皆集郡

“二十三年 612 正月 帝は下詔した・・・(訳) 戦闘の話”

帝下詔曰 高句麗小醜 迷昏不恭 崇聚勃碣之間 荐食遼之境・・・

“二十四年 613 正月 帝は天下の兵を徴し、群に集め、民を募り驍果と
し、遼東古城を修復して、軍糧を貯えた。・・・”

帝詔徴天下兵 集郡 募民爲驍果 修遼東古城 以貯軍糧・・・

“二月 帝は侍臣に謂った：・・・(訳) 戦闘の話”

帝謂侍臣曰 高句麗小虜 侮慢上國．．．

“二十五年 614 二月 帝は百寮を招集して高句麗を伐ことを計った。”

帝詔百寮 議伐高句麗

“二十九年 618 九月 王は薨かった。嬰陽王と号した。” 王薨 號曰嬰陽王

13.27. 第 27 代 榮留王 618-640 成（建武）

% A4,, 5390 高句麗 08

618 年は唐成立の年。

“二年 619 二月 唐に使いを遣わし朝貢した。” 遣使如唐朝貢

“四月 王は卒本に幸して、始祖廟を祀った。” 王幸卒本 祀始祖廟

“五年 622 唐の高祖は隋末に多くの戦士がここで死んだことに感じ、王に賜った詔書で： . . . ” 唐高祖

感隋末戦士多陷於此 賜王詔書曰 朕恭膺寶命 君臨率土 祇順三靈 懷柔萬國 . . .

“七年 624 二月 王は唐に使いを遣わし、 . . . (訳)”

王遣使如唐 請班 遣刑部尚書沈叔安 策王爲上柱國遼東郡公高句麗國王 命道士以天尊像及道法 往爲之講老子 王及國人聽之

“八年 625 王は唐に使いを遣わし佛老の教法を学ぶことを求めた。帝はこれを許した。” 王遣人入唐求學佛老教法 帝許之

唐の初代皇帝高祖李淵は 626 年に第 2 代皇帝太宗李世民に譲位した。太宗は 649 年に崩御した。

“九年 626 新羅と百済は唐に使いを遣わし、奏上した：高句麗が道を閉ざし、使不得朝、また、侵し掠めると。帝は散騎侍郎の朱子奢に持節で

遣わし、和を諭した。王は謝罪を謝罪、請與二國との和平を要請した。”

新羅・百濟遣使於唐 上言 高句麗閉道 使不得朝 又相侵掠 帝遣散騎侍郎朱子奢
持節諭和 王奉表謝罪 請與二國平

“十一年 628 唐に使いを遣わし、太宗が突厥の頡利可汗を捕えたことを
賀した。．．．” 遣使入唐 賀太宗擒突厥頡利可汗 兼上封域圖

“十二年 629 八月 新羅の將軍金信が東邊に來侵し、娘臂城を破った。”

新羅將軍金信 來侵東邊 破娘臂城

“十四年 631 唐は廣州の司馬長孫師を遣わし、隋との戦いの戦士の骸骨
を祭り、そこに建つ京觀を毀した。”

唐遣廣州司馬長孫師 臨隋戰士骸骨 祭之 毀當時所立京觀

“二月 王は衆を動員して、長城を築いた。それは東北は夫餘城から東南
は海に至る千餘里で、凡そ十六年かかった。”

王動衆築長城 東北自夫餘城 東南至海 千有餘里 凡一十六年畢功

文からは、東の敵に備えたものと思われるが、唐の強大さから、これ
に備えたのかもしれない。

“二十一年 638 十月 新羅の北邊の七重城を侵した。新羅の將軍は川で闘
いた。七重城外で戦い我兵は敗れた。”

侵新羅北邊七重城 新羅將軍閼川逆之 戰於七重城外 我兵敗衄

“二十三年 639 二月 世子の桓權を唐に遣わし朝貢した。．．．王子の弟を唐に遣わし、學ぶことを要請した。”

遣世子桓權入唐朝貢 太宗勞慰 賜賚之特厚．．．遣王子弟入唐 請入國學 秋九月
日無光 經三日復明

“二十四年 641 帝は我が太子入朝させた。職方郎中の陳大德を派遣し、
勞に答えた。．．．”

帝以我太子入朝 遣職方郎中陳大德答勞 大德入境 ．．．

“二十五年 642 正月 唐に使いを遣わし朝貢した。王は西部大人の蓋蘇文
に長城の役の觀察を命じた。”

遣使入唐朝貢 王命西部大人蓋蘇文 監長城之役

“十月 蓋蘇文が王を弑した。”

蓋蘇文弑王

遣使如(入)唐朝貢 唐に使いを遣わし朝貢した。

四年 621 七月

五年 622

六年 623 十二月

七年 624 二月 十二月

十二年 629 九月

二十三年 639 二月

13.28. 第 28 代 寶藏王 642-668 臧（寶臧）

% A4, , 5458 高句麗 09, 10

“国を失った王であるから諡は無い。榮留王(建武王)の弟大陽王の子である。建武王二十五年に蓋蘇文が王を弑して、臧が立ち、あとを継いだ。新羅が百濟を伐つことを謀り、金春秋を遣わして師を乞うたが、従わなかった。”

以失國故無諡 建武王弟大陽王之子也 建武王在位第二十五年 蓋蘇文弑之 立臧繼位 新羅謀伐百濟 遣金春秋乞師 不從

金春秋は後の新羅武烈王でる。師とは王の補佐であり、このときは、金春秋は新羅の臣ではなかった。これが何故新羅王となったのか。

“二年 643 正月 父を王に封じた。唐に使いを遣わし朝貢した。”

封父爲王 遣使入唐朝貢

“秋九月 新羅は唐に使いを遣わしいった：百濟が我が四十餘城を攻め取った。また、高句麗と連兵し、入朝の路を閉ざした。救援の兵を求める。”

新羅遣使於唐 言 百濟攻取我四十餘城 復與高句麗連兵 謀絶入朝之路 乞兵救援
百濟と新羅は互いに攻防するようになった。

“三年 644 正月 唐に使いを遣わし朝貢した。帝は司農丞相の里玄獎に璽書を齎うように命じた。．．．(訳)”

遣使入唐朝貢 帝命司農丞相里玄獎 齎璽書賜王曰新羅委質國家朝貢不乏 爾與百濟 各宜兵 若更攻之 明年發兵 擊爾國矣 玄獎入境 蓋蘇文已將兵擊新羅 破其兩城．．．

この後、長文で太宗による高句麗を滅ぼす経緯が書かれている。太宗は唐の 2 代皇帝。

“五年 646 二月 太宗が京師に還った。”

太宗還京師

“五月 王と莫離支蓋金は使いを遣わし謝罪した。”

王及莫離支蓋金 遣使謝罪

“六年十二月 王は第二子の獫狁氏人猛を使いとして送り謝罪した。帝はこれを許した。”

王使第二子莫離支任武 入謝罪 帝許之

“七年 648 正月 唐に使いを遣わし朝貢した。”

遣使入唐朝貢．．．

“六月 帝は謂った：我は困弊している。明年三十萬衆を發し、一挙に高句麗を滅ぼすことを議した。”

帝謂我困弊 議以明年發三十萬衆 一舉滅之

“八年 649 四月 唐の太宗は崩御した。遺詔で遼東之役を罷めた。”

唐太宗崩 遺詔罷遼東之役

次の皇帝は第 3 代高宗李治で在位は 683 年まで。

“九年 650 六月 盤龍寺の普徳和尚は国家奉道をもって仏法を信じなかった。完山孤大山を南に移した。”

盤龍寺普徳和尚 以國家奉道不信佛法 南移完山孤大山

“十一年 652 正月 唐に使いを遣わし朝貢した。” 遣使入唐朝貢

“十三年 654 十月 王は將軍の安固を出師させた。靺鞨兵・契丹・松漠都督李窟哥がこれを禦ぎ、我が軍は新城で大敗した。”

王遣將安固出師及靺鞨兵 契丹 松漠都督李窟哥禦之 大敗我軍於新城

“十四年 655 正月 さきに、我と百濟・靺鞨は新羅の北辺を侵し、33 城を取った。新羅王の金春秋は唐に使いを派遣し、救援を求めた。”

先是 我與百濟靺鞨 侵新羅北境 取三十三城 新羅王金春秋 遣使於唐求援

“二月 高宗は營州都督程名振・左衛中郎將蘇定方を派遣し、將兵が来た。” 高宗遣營州都督程名振左衛中郎將蘇定方 將兵來

“五月 名振らは遼水を渡った。吾が人が見るに、その兵は少ない。門を開き、貴端水を渡り、逆に戦った。名振らは大いに奮戦したこれに克った。千人余りを殺獲し、外郭と村落を焚やし、帰ってきた。”

名振等 渡遼水 吾人見其兵少 開門度貴端水 逆戰 名振等奮 大克之 殺獲千餘人 焚其外郭及村落而歸

“十五年 656 十二月 使いを唐に派遣し、皇太子に賀(冊?)した。”

遣使入唐賀冊皇太子

この後、唐による高句麗征討の記事

“十七年 658 六月 唐の營州都督兼東夷都護程名振と右領軍中郎將薛仁貴の將兵が攻めてきた。克てなかった。”

唐營州都督兼東夷都護程名振 右領軍中郎將薛仁貴 將兵來攻 不能克

“十八年 659 十一月 唐の右領軍中郎將薛仁貴らと我が將軍溫沙門が横山で戦い、これを 破った。”

唐右領軍中郎將薛仁貴等 與我將溫沙門 戰於横山 破之

“二十年 661 正月 唐は河南北と淮南六十七州の兵を募り、四萬四千餘人を得、平壤に向かった。(?鏤方行營)また、鴻臚卿蕭嗣業を扶餘道行軍摠管とし、帥回ら諸部兵が平壤に向かった。”

唐募河南北淮南六十七州兵 得四萬四千餘人 詣平壤鏤方行營 又以鴻臚卿蕭嗣業爲扶餘道行軍摠管 帥回等諸部兵 詣平壤

“四月 任雅相を江道行軍摠管、契何力を遼東道行軍摠管、蘇定方を平壤道行軍摠管と蕭嗣業および諸胡兵およそ三十五軍が水陸に分かれ進撃した。帝は自ら大軍を率いたいと望んだが、蔚州刺史の李君球がいった：・・・(訳)”

以任雅相 爲江道行軍摠管 契何力 爲遼東道行軍摠管 蘇定方 爲平壤道行軍摠管 與蕭嗣業及諸胡兵凡三十五軍 水陸分道並進 帝欲自將大軍 蔚州刺史李君球立言 高句麗小國 何至傾中國事之有 如高句麗既滅 必發兵以守 小發則威不振 多發則人不 安 是天下疲於轉戍

“五月 王は將軍惱音信を派遣し、靺鞨を率いて、新羅北漢山城を囲んだ。10日間落とせなかった。新羅が糧道を絶ち、場内は恐れた。大星が我が陣に落ち、雷雨震があり、音信になやみ(?)、引き返した。”

王遣將軍惱音信 領靺鞨衆 圍新羅北漢山城 浹旬不解 新羅餉道絶 城中危懼 忽有大星落於我營 又雷雨震 惱音信等 疑駭引退

“八月 蘇定方は江で我が軍を破り、馬邑山を奪い、平壤城を囲んだ。”

蘇定方破我軍於江 奪馬邑山 遂圍平壤城

“九月 蓋蘇文は子の男生を派遣し、精兵數万で鴨を守らせた。諸軍は渡ることが出来なかった。契何力が到着したとき、氷が結合した。何力は氷に乗り河を渡った。鼓を鳴らし進んだため、我が軍は潰奔した”

蓋蘇文遣其子男生 以精兵數萬守鴨 諸軍不得渡 契何力至 值氷大合 何力引衆乘氷度水 鼓噪而進 我軍潰奔

“二十一年 662 正月 左驍衛將軍白州刺史沃沮道摠管の孝泰と蓋蘇文は蛇水の上で戦った。擧軍は負け、蓋其と子十三人は皆戦死した。蘇定方は平壤を囲んだが、大雪に合い解けずに退いた。・・・”

左驍衛將軍白州刺史沃沮道摠管孝泰 與蓋蘇文戰於蛇水之上 擧軍沒 與其子十三人 皆戰死 蘇定方圍平壤 會大雪 解而退 凡前後之行 皆無大功而退

“二十五年 666 王は太子の福男を派遣した。新唐書は男福という。唐に入り、泰山で侍祠した。”

王遣太子福男 新唐書云男福 入唐 侍祠泰山

“蓋蘇文が死に、長子の男生が代わりに莫離支となった。知国政となり、諸城を巡った。弟の男建と男産留め、後事を託した。”

蓋蘇文死 長子男生代爲莫離支 初知國政 出巡諸城 使其弟男建男産 留知後事

“九月 帝は男生を詔し、遼東都督兼平壤道安撫大使を授け、玄菟郡公に封じた。”

帝詔男生 授特進遼東都督兼平壤道安撫大使 封玄菟郡公

“十二月 高宗は李勣を遼東道行軍大總管とし、安撫大使を兼ねさせた。・・・(訳)”

高宗以李勣爲遼東道行軍大總管 兼安撫大使 以司列少常伯安陸處俊副之 同善契何力 並爲遼東道行軍副大總管兼安撫大使 其水陸諸軍總管 并轉糧使竇義積獨孤卿雲郭待封等 並受勣處分 河北諸州租賦 悉詣遼東給軍用

“二十六年 667 九月 李勣は新城を抜いた。”

李勣拔新城

“二十七年 668 正月 右相の劉仁軌を遼東道副大總管とし、處俊金仁問(?)を副とした。”

以右相劉仁軌爲遼東道副大總管 處俊金仁問副之

“九月 李勣は平壤を抜いた。これは高宗總章元年である。”

李勣拔平壤 是高宗總章元年戊辰歲也

“十二月 帝は俘を含元殿に受けた。王政は非己出、赦し司平大常伯員外同正とした。泉男産を司宰少卿とし、僧信誠を銀青光祿大夫とし、泉男生を右衛大將軍とした。李勣以下はそれぞれに封賞をした。五部百七十六城六十九万余戸を九都督府四十二州百県に分けた。安東都護府を平壤に置き、これらを統治した。・・・。”

帝受俘于含元殿 以王政非己出 赦以爲司平大常伯員外同正 以泉男產爲司宰少卿
僧信誠爲銀青光祿大夫 泉男生爲右衛大將軍 李勣已下 封賞有差 泉男建流黔州 分
五部百七十六城六十九萬餘戶 爲九都督府四十二州百縣 置安東都護府於平壤 以統
之 擢我將帥有功者爲都督刺史縣令 與華人理 以右威衛大將軍薛仁貴 檢校安東都護
摠兵二萬人 以鎮撫之 是高宗總章元年戊辰歲也

13.29. 滅亡後

%% A4, ,5584 高句麗 10

總章は唐の元号で 668 年から 670 年までで、咸亨は 670 年から 674 年までである。

“總章二年 669 二月 王の庶子安勝は四千余戸を率いて、新羅に投じた。”

王之庶子安勝 率四千餘戸 投新羅

“咸亨元年 670 四月 劔牟岑は国家を復興しようとして、唐に叛き、王の外孫安舜を立て、羅紀作勝(?)を主とした。唐の高宗は大將軍高侃を東州道行軍摠管として派遣し、これを討った。安舜は劔牟岑を殺し、新羅に奔走した。”

劔牟岑欲興復國家 叛唐 立王外孫安舜 羅紀作勝

爲主 唐高宗遣大將軍高侃 爲東州道行軍摠管 發兵討之 安舜殺劔牟岑 奔新羅

“咸亨二年 671 七月 高侃は残った衆を安市城で破った。”

高侃破餘衆於安市城

“儀鳳二年 677 二月 降伏した王を遼東州都督とし、朝鮮王に封じた。遼東に帰した。安輯餘衆(?)と諸州に住む東人は皆王とともにかえした。新城に安東都護府を移し、これらを統治した。”

以降王爲遼東州都督 封朝鮮王 遣歸遼東 安輯餘衆 東人先在諸州者 皆遣與王俱歸 仍移安東都護府於新城 以統之

“垂拱二年 686 降伏した王の孫寶元を朝鮮郡王とした。”

以降王孫寶元爲朝鮮郡王

“聖初になって、左鷹揚衛大將軍に進めた。さらに忠誠國王に封じた。

安東旧部(?都)でおさめさせようとしたが、行かなかった。”

至聖初 進左鷹揚衛大將軍 更封忠誠國王 使統安東舊部 不行

“明年 降伏した王の子徳武を安東都督とした。しばらくして、自国

に。”

以降王子徳武爲安東都督 後稍自國

“至元和十三年 818 使を唐に派遣し、樂工を献じた。” 遣使入唐獻樂工

690 年から 705 年までは則天武后。697 年 1 年の元号は神功。

垂拱と元和の間に聖初はない。字がかぶるのは載初(690 年)のみである。

あとがき